Sit up, lay down動作時に腹圧上昇依存性に咳嗽が誘発される徴候は胃食道逆流症による咳嗽の身体所見か?

松原英俊
医仁会武田総合病院　総合診療科

【目的】胃食道逆流症（GERD)は多彩な食道外症状が知られており、慢性咳嗽、咽喉頭異常感症、副鼻腔炎などがある。このことは急性期においてもGERDが咳嗽、咽喉頭・鼻症状をきたしうることを示唆している。そこで、一般外来の上気道炎症状にGERDの関与が疑われる場合早期にGERDの病態に即した治療を行えば治療期間の短縮や早期にQOL改善が望める可能性がある。今回外来診察時にsit up, lay down動作時腹圧上昇に依存し咳嗽が誘発される(sit up sign, lay down sign 陽性と略す)患者が複数いることを発見した。GERDによる逆流は腹圧上昇時や臥位時に誘発されやすいことからこのような患者はその病態の背景にGERDが存在すると考えられ、外来診療録よりレトロスペクティブな解析を行い病態の理解と治療の妥当性を検討した。

【方法】対象:平成24年9月1日から翌年3月31日の期間咳嗽症状のため特定の医師を外来初診した患者でsit up sign, lay down signのいずれかが陽性の患者11名(20～61歳,男性3名、女性8名)。該当患者の外来カルテから、現病歴、身体所見などを解析した。

【結果】咳嗽罹病期間は3日～5ヶ月であり、8例が急性咳嗽であった。就寝時 (5例)、朝起床時(5例)に咳嗽を有する患者が多かった。発作的が5例、腹痛が3例、呑酸が2例、食物摂取の増加が3例で先行、1例で胸焼けも認めた。5日前ｲﾝﾌﾙｴﾝｻﾞ Aと診断され加療解熱後の咳嗽患者も1例認めた。sit up signは11例中陽性8例、うち2例で喉症状が咳嗽誘発に先行、切迫咳嗽が1例であった。lay down signは9例中7例で陽性であった。治療は全例で生活習慣の改善の指導をおこない、また投薬内容はﾌﾟﾛﾄﾝﾎﾟﾝﾌﾟ阻害薬6例、ｶﾙﾎﾞｼｽﾃｨﾝ10例、ﾃﾞｽﾄﾛﾒﾄﾙﾌｧﾝ9例、ﾘﾝ酸ｺﾃﾞｨﾝ1例、半夏厚朴湯10例、五苓散10例であった。2週間以内の投薬にもかかわらず、1ヶ月以内に咳嗽のため再診する患者はなかった。

【考察】sit up sign, lay down sign陽性患者にGERDに沿った治療を行うことはある程度妥当であると考えられた。